

と く
徳

ほ う
朋

どもならん

まつもと かじまる
松本 梶丸

まつもと かじまる

1938—2008

石川県出身。真宗大谷派
宗務所出版部、研修部勤
務を経て、真宗大谷派本
誓寺元住職。

「人間ははじめから手も足も出んようになつとるがや」。石川県吉野村の山崎ヨシさんの言葉である。「人間は聞いてからなろうとする。ほんとうの聞き方はそうじゃない。なつとることを聞けと。そのままの世界やね。なつとるがやもん。なつとることを聞きや文句のない世界です」。小松市白江町で求道聞法の生涯を全うされた北村金次郎さんの言葉である。「この障子はオラの根性とそっくりやなあ。押しても引いても、ほんまにどもならんもんがここにおる。」雪の重さのため、立て付けの悪くなった障子をガタガタいわせながらの、あるおばあちゃんのひとりごとである。三十年も前に亡くなったその母親のつぶやきが今も、その娘の胸の内に生き続けているという。

これらの言葉は「知っている」「分かっている」という人間の知恵から生まれた言葉ではない。如来に照らし出された、人間の生命の深みからの名告りである。

浄土真宗ではこの生命の目覚めを「機の深信」と教えられる。まごうかたなき、ただ今のこの身への目覚めをあらわした言葉である。人間の自信は、学歴や肩書や健康のうえに構築された自信であろう。「私は健康だけには絶対に自信があります」と宣言していたある俳優が、その半年後に癌のために亡くなった。人間の自信は砂上の楼閣の上にたてられた自信ではないか。「どもならん」「なつとるがやもん」という自信は、如来の智慧に照らし出されて、生命に頭が下がった自信

である。

「自信のあるものは謙虚^{けんきょ}である。自信のないものは傲慢^{ごうまん}である」と曾我量深^{そがりょうじん}先生は言われるが、謙虚さは謙虚になろうとしても生まれてこない。真実の言葉に触れて、この身を知らされた時に、はからずも仏智^{ぶつち}よりたまわる世界である。「仏法^{ぶつぽう}さまでオラを見せてもらおうと、人さまのこと言うとれん」。この言葉に出会ったのは、もう二十年も前の事であろうか。今は亡き金沢市鈴見町の桑本定さんの言葉である。私にとっては古典ともいうべき、これらのお年寄りの言葉は、今も私の耳に鳴りひびき、眠り込もうとする私を呼び覚まし続けてくれるのである。

(『生命^{いのち}の見える時 一期一会』)

語注

機^きの深信^{じんしん}・・・自分の思いによっては絶対に救われない宿業の身を生きる自分だと知らされる事。つまり自身が絶対に思い通りにならない身と人生を生きているという事に対して、深く^{うなず}頷く事。



仏法とは事実を教えて下さる教えです。それは私たちが事実を事実として見る事が出来ずに、妄想を抱いて一生懸命に生きている存在だから、はっきりと教えられなくては分からないのです。(哲弘 拝)

この「徳朋^{とくほう}」は仏教を拠り所として生活した方々の言葉に直に触れ、仏教を頭で一生懸命に理解するのではなく、この身で感じる事を願いとして副住職が毎月作成しています。